

市民活動状況
(6月末日現在)

市内NPO法人数	31 団体
当センター登録団体数	154 団体
来館者数	1,209人
印刷機利用枚数	22,794枚

ひびき



発行枚数 650枚 メール配信 100団体

発行人 指定管理者NPO法人茨城県南生活者ネット 龍ヶ崎市市民活動センター長 島村宏之

龍ヶ崎市市民活動センターは社会貢献活動を行う団体を支援するための施設です。
 会議スペース・作業スペース・印刷機・紙折り機・パソコン・多目的室等(1階)や
 大会議室・小会議室・パソコン室・和室・工作室(2階)・陶芸室(1階外倉庫隣り)がご利用いただけます。
 開館時間 = 午前9時～午後7時(日曜祝日は午後5時まで)2階各室は夜間も(午後10時まで)利用可能です。
 休館日 = 月曜日および年末年始、特別に定める日
 〒301-0004 龍ヶ崎市馴馬町2445 TEL 0297-63-0030 / FAX 0297-63-0571
 E-mail r-suwan@titan.ocn.ne.jp URL https://ryugasaki-shiminkatsudo.net



市民団体活動紹介シリーズ No.23「つるし飾りサークル」

目指せ！市民活動日本一

つるし飾りの風習は江戸時代から伝わり、3月3日のひな祭りの時、こどもの成長を祈りながら 家族、親戚、近所の方など少しずつ布の端切れでお人形を作って持ち寄り、飾られたことがつるし雛で「つるし飾り」の始まりとのことです。

「つるし飾りサークル」では、伝統的な作品から現代的な作品など、いろいろな作品を作成し今はあじさいの花を作成中でした。

バタバタした日常の中、ひと針ひと針……作品を作りあげる そんな時間があるのもいいですね。

お仲間を募集してます 参加お待ちしております。

市民活動
日本一

龍ヶ崎まちづくり講座「関東鉄道竜ヶ崎線の現状と課題」の報告

7月2日(日)開催、主催、龍ヶ崎市市民活動センター及び比較住宅都市研究会。

講師には関東鉄道取締役 鉄道部長 北村恵喜様を予定していましたが、体調不良のため、鉄道部業務課の高橋忠隆様と野村洋介様にピンチヒッターでお話しいただきました。

このテーマは乗客の減少という多くの地方鉄道が抱えている共通の悩みであり、龍ヶ崎のまちづくりに不可欠アイテムと考える市民も多く、市内外から関心度が高く、市・都市計画課の方、市議会議員の方、筑波大の学生さん、鉄道マニアの方など定員を大幅に超過し、38名の方にご参加いただきました。そのほか遠方からオンラインで5名の方にご参加いただきました。

まず、講師の高橋様より「竜ヶ崎線は123年の歴史があり、営業距離4.5km、駅数3駅で有人は竜ヶ崎駅だけ。運行本数は1日上下40本、1時間2本、朝の通勤帯は2両で通常は1両編成で運行している。運賃は230円、利用者数は平成元年142万人から令和4年には70万人に半減、コロナで落ち込んだ利用者が令和5年には戻りつつある。学校訪問などの営業をしているが、通勤者が減少するなど厳しい状況が続いている」と、竜ヶ崎線の歴史、運行状況、総人員の推移、収益の推移といった現状と今後の課題について30分ほどお話いただきました。

その後、約40名+オンラインによる1時間30分のディスカッションでは「コミバスとの連携」「子供へのアプローチ」「乗り継ぎ料金を割安にする」「欧米を参考にした公共交通の補助金制度の導入」「移住者の促進」「沿線に花を植える」「竜ヶ崎駅前に魅力的な施設をつくる」「歴史的建造物を生かした魅力的なまちづくり」「竜ヶ崎線がなくなれば中心市街地が中心でなくなってしまう」「これは関東鉄道というより、龍ヶ崎市、及び市民の取り組みとして考えなければいけない」といった様々な意見がありました。



講座のお知らせ

☆新企画講座「YouTube動画入門」☆

日 時: 8月27日(日)午後1時30分～3時30分

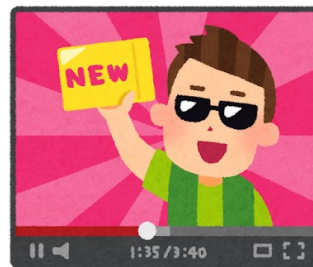
場 所: 市民活動センター2階パソコン室 スリッパ持参

講 師: 渡邊 隆史氏(元アニメージュ・ニュータイプ編集長)

参加費: 無料

定 員: 20人

受 付: 受付中 センター窓口又は電話 0297-66-0030



★夏の星空観察会 月、土星、夏の大きな三角形をみよう! ★

日 時: 8月27日(日) 午後7時～8時30分

場 所: 龍ヶ崎市市民活動センター 駐車場

雨天の場合: 2階パソコン室にて星のスライド上映、星空クイズ等

たなちあき

講 師: 天体写真家 田中千秋先生(国際天文学連合小惑星センター承認の小惑星「chiakitanaka」の命名者)

参加費: 300円(保険代・資料代)

定 員: 30人

受 付: 8月11日(金)午前9時から **受付は電話のみ** 電話 0297-66-0030



龍ヶ崎ヒストリー第16回「道仙田の詩人 英美子」

英美子(はなぶさよしこ)本名中林文、静岡市出身、西條八十の導きで詩の世界に入りました。戦後は『日本未来派』同人として活躍。晩年はマドリッド・アテネオ劇場で自作詩朗読リサイタルを行う等、昭和58年に亡くなるまで第一線で活躍されました。享年90歳。一人息子は中林淳真(あつまさ)現役のギタリストとして今も活躍。

美子は昭和20年4月、東京本郷から戦火を逃れるため、リヤカーに家財道具一式を詰め、旧制中学を卒業したばかりの息子淳真と共に、2昼夜かけ茨城県筑波郡久賀村(現取手市新川)にやってきました。仮住まいは淳真が見つけた新川の三角州に建つ廃屋同然の集会場で家賃はタダでした。

美子は戦争が終わったら直ぐにでも東京に帰るつもりでした。ところが鮎釣にのめり込み、もっと鮎釣のことを研究したいと主張する我が子のために、この地に身を置くことを決心しました。

昭和24年川原代村道仙田(現龍ヶ崎市川原代町)の旧小貝川のほとりに三間ほどの小さな家を建て住居と決めました。淳真は釣り仲間との共同出資で旧小貝川道仙田地区の管理権を取得しました。年々増える無謀な釣師に注意をする等、入漁料を取って釣り場を管理するのは主に美子の役割でした。釣師からはうるさいババアと罵られる。窓から聞える淳真のクラシックギターは場違いで煩(うるさ)いだけ。釣り仲間からはもっぱら変わり者親子と思われていたようです。

主な収入は淳真の漁師としての腕で、この時代は鮎などの川魚が高く売れたようです。そのほかにも音楽学校に通う傍ら、ギターの個人レッスンのアルバイトと超多忙の日々が続き、しだいに淳真の身体を病魔が蝕んでいました。そんな折、この地方を大豪雨が襲い(昭和25年小貝川の氾濫)、堤防警備に駆り出された淳真は過労から肺結核に罹り、東京の病院で闘病生活を送ることになりました。

稼ぎ頭を失った一家は、貯えもあつという間になくなり、収入は美子の僅かな原稿料だけとなりました。幸いにも医療費は村の民生部から援助を受けることが出来ました。

母の身を削るような看病と神への祈りが1年以上続きました。はたして、母の祈りが通じたのでしょうか。淳真は病気に打ち勝ち、笑顔で道仙田の我が家に戻って来ました。ふたたび平穏な日常を取り戻した母子は昭和40年までこの地で過ごしました。

英美子著「春鮎日記」には旧久賀村と道仙田で過ごした日常が記録されています。母子が過ごした旧小貝川のほとりには英美子の詩碑が建っています。



英美子「川」詩碑(社会福祉センター駐車場脇)⇒

龍ヶ崎短歌会

九時からの日曜討論ききたきに庭の片付け早めに始む

あいみよんの主題歌流れ口ずさむ吾も前見て今日のひと日を

吉田綾子

石渡静夫